

交通事故による慢性期重度脳損傷患者に対する合同訓練の試み

○船倉 美香¹、児島 美智子¹、小林 球記¹、萩原 千春¹、山口 美佐子¹、小瀧 勝²、岡 信男²

¹自動車事故対策機構 千葉療護センター リハビリテーション科、

²自動車事故対策機構 千葉療護センター 脳神経外科

【はじめに】千葉療護センターは交通事故による重度脳損傷患者の専門病院である。当センターでは1年間、「日常生活と異なる刺激を与え反応を探る」「社会性の向上」「コミュニケーション活動の活発化」を目的に合同訓練を試みたので報告する。

【方法】1回/週、40分/1回、3～5名/1回。実施内容はスヌーズレン、お菓子作り、楽器演奏、ゲーム、作品作り、買い物等。

【対象】スヌーズレンは治療病棟の全入院患者66名(年齢18～71歳、発症経過年数1.1～14.4年)、その他の内容では、一部に随意運動、指示動作があり、方法を問わずコミュニケーションが取れる患者16名(年齢18～71歳、発症経過年数1.1～9年)。

【結果】スヌーズレンではリラックスする様子や空間を楽しむ様子が観察された。その他の内容では、徐々に合同訓練に慣れ、表情が和らぎ、自ら参加することが増えた。他患への意識にも変化がみられ、一部では患者同士で挨拶を交す交流が生まれている。合同訓練の成果を発表する場では、今までにない集中力を発揮した。

【考察】1年間合同訓練を行い、他患を意識する環境を設定する中で、集中力や状況判断等において個別訓練では引き出せない反応が認められる。また、療法士間で共有した観察結果を各々の個別訓練に反映することができている。重度脳損傷患者の評価法は確立されておらず、当センターでも認知の証拠を始め、様々な事柄は観察で発見される。合同訓練では、変化は僅かだが、複数の療法士間で共通の変化を確認している。今後はその変化や成果を客観的に示せる評価の項目や尺度の統一が課題となる。